

【研究資料】

宮本武蔵筆『兵法三十五箇条』再現テキスト

町田 輝雄

外国語学研究室

„Heiho Sanjugokajo“

—eine erneuerte Wiedergabe der Schrift Miyamoto Musashis—

Teruo MACHIDA

Zusammenfassung: Das folgende Material beruht auf einer früheren Abhandlung des Autors, in der er bereits einen eigenen Übersetzungsversuch dieser Schrift ins Deutsche unternommen hatte. Bis heute wurden zwar mehrere Bücher veröffentlicht, die das „Heiho Sanjugokajo“ enthalten, jedoch wenn man diese vergleicht, so finden sich im Einzelnen nicht wenige Unterschiede im Wortlaut oder auch Auslassungen. Daher war es unerlässlich, noch vor der Übersetzung, zunächst einmal diese Schriften insgesamt genau zu überprüfen und einen möglichst authentischen Grundtext herauszufinden.

Den wiedergegebenen Text hat der Autor bis jetzt nur an den engsten Kreis der Niten-Ichi-Ryu-Schule, an einige Kendo-Freunde oder auf besonderen Wunsch weitergegeben, doch besteht weiterhin eine starke Nachfrage sowohl in Japan als auch im Ausland. Wenn die Unterschiede in den Schriften auch gering erscheinen, so kann dies doch für diejenigen, die nach der Lehre Miyamoto Musashis ihr Schwert und ihr Herz stählen, zu einer unüberwindbaren Kluft werden. Wenn dieser Grundtext dazu beitragen könnte, der wahren Gesinnung unseres Meisters Musashi näher zu kommen, würde der Autor sich glücklich schätzen.

(Received: April 26, 2016 Accepted: June 6, 2016)

Schlüsselwörter: MIYAMOTO Musashi, Niten-Ichi-Ryu, Heiho Sanjugokajo, Gorin-no-sho, Kendo

キーワード: 宮本武蔵, 二天一流, 兵法三十五箇条, 五輪書, 剣道

以下の「資料」は、筆者が先行論文において同文書のドイツ語訳を試みた際に、その底本として独自に編集したものである*¹。『兵法三十五箇条』を収録する書籍は今日までに幾種類か公刊されているが、それらを比較考量すると、細部における文言の異同や欠落等が少なからず存在する。そこで翻訳に先立ち、まずは文献相互を精査し、信頼に足るテキストの再現が必要となった次第である。

再現されたテキストは、二天一流を学ぶ同好の士と剣友および一部の希望者に対してのみ配布してきたが、入手を強く望む国内外からの問い合わせが絶えない。たとえ僅かな相違であっても、宮本武蔵の教えに沿って己の剣と心を鍛錬する者にとって、その溝は越え難い谷となりうるからであろう。この再現テキストが、武蔵先生の真髓へと接近する一助となれば幸いである。

〈頭注〉

『兵法三十五箇条』は新免武蔵玄信によって執筆され*²、寛永十八年（1641年）二月吉日に熊本藩主・細川忠利へ呈上された文書である。武蔵直筆の「原典」は所在不明。本文書は内容的に、ご自身が10年程前に名古屋で記し残した円明流の伝書を基に作成されたと思われる。なお、「兵法三十五箇条」という書名は後の通称である*³。

〈編集方法〉

以下の条文は主として、①『宮本武蔵』（宮本武蔵遺蹟顕彰会編纂・1909年〔初版〕）所収の文書を原本とし、そ

れを②『定本 五輪書』（魚住孝至・新人物往来社・2005年）の文献学的考証を基に校閲し、さらに③『武蔵「円明流」を学ぶ』（赤羽龍夫・スキージャーナル・2010年）所収の「円明流兵法三十五ヶ条」および「円明三十五ヶ条の内（柳生本）」を参照しつつ、その全体を再現した*4。

〈凡例〉

- ・「執筆要領」に従い、縦書きの文書を横書きに改めた。
- ・句読点については原則的に①に従うが、明らかな誤植や前後関係から過不足だと思われる箇所には、任意に変更を加えた。また、文末の読点「、」は句点「。」に改めた。
- ・①の旧漢字については、意味の変更がない限り、現代漢字に改めた。
- ・②において訂正が示唆されている箇所は、傍点「・・・」を付して太字とした。
- ・②に散見される欠落箇所は、随時補完し、下線「_____」を付して太字とした。
- ・読者への便宜を図るため、各条見出しの直後に①～③⑥の通し番号を付すとともに、()内に『五輪書』の対応巻および条目名を付記した。なお、対応条目が存在しない場合は(***)で示した。

『兵法三十五箇条』

(序)

兵法二刀の一流数年鍛錬仕処、今初て筆紙にのせ申事、前後不足の言のみ難申分候へ共、常々仕覚候兵法之太刀筋心得以下、任存出大形書頭候者也。

一 此道二刀と名付事 ① (地：「此一流二刀と名付る事」)

此道二刀として太刀を二ツ持儀、左の手にさして心なし。太刀を片手にて取ならばせん為なり。片手にて持得、軍陳、馬上、沼川、細道、石原、人籠、かけはしり、若左に武道具持たる時、不如意に候へば、片手にて取なり。太刀を取候事、初はおもく覚れ共、後は自由に成候也。たとへば弓を射ならひて、其力つよく、馬に乗得ては、其力有。凡下之わざ水主はろかひを取て、其力有。土民はすきくはを取、其力強し。太刀も取習へば、力出来物也。但人々の強弱は、身に应じたる太刀を持べき物也。

一 兵法之道見立処之事 ② (地の巻)

此道大分之兵法、一身之兵法に至迄、皆以て同意なるべし。今書付一身の兵法、たとへば心を大将とし、手足を臣下郎等と思ひ、胴体を歩卒土民となし、国を治め身を修る事、大小共に、兵法の道におなじ。兵法之仕立様、惣躰一同にして余る所なく、不足なる処なく、不強不弱、頭より足のうら迄、ひとしく心をくばり、片つりなき様に仕立る事也。

一 太刀取様之事 ③ (水：「太刀のもちやうの事」)

太刀之取様は、大指人さし指を請て、たけたか中、くすしゆびと小指をしめて持候也。太刀にも手にも、生死と云事有り。構る時、請る時、留る時などに、切る事をわすれて居付手、是れ死ぬると云也。生と云は、いつとなく、太刀も手も出合やすく、かたまらずして、切り能き様にやすらかなるを、是れ生る手と云也。手くびはからむ事なく、ひぢはのびすぎず、かゝみすぎず、うでの上筋弱く、下すぢ強く持也。能々吟味あるべし。

一 身のかゝりの事 ④ (水：「兵法の身なりの事」)

身のなり顔はうつむかず、余りあをのかず、かたはさゝず、ひづまず、胸を出さずして、腹を出し、こしをかゝめず、ひぎをかためず、身をまむきにして、はたばり広く見する物也。常住兵法與身、兵法常の身と云事、能々吟味在るべし。

一 足ぶみの事 ⑤ (水：「足づかひの事」、風：「他流に足つかひ有事」)

足づかひ時々により、大小遅速は有れ共、常にあゆむがごとし。足に嫌ふ事、飛足、うき足、ふみすゆる足、ぬく足、おくれ先立つ足、是皆嫌ふ足也。足場いか成る難所なりとも、構なき様に髓にふむべし。猶奥の書付にて能くする、事也。

一 目付之事 ⑥ (水：「兵法の目付と云事」)

目を付と云所、昔は色々在るなれ共、今伝る処の目付は、大體顔に付るなり。目のおさめ様は、常の目よりもすこし細様にして、うらやかに見る也。目の玉を不動、敵合近く共、いか程も、遠く見る目也。其目にて見れば、敵のわざは不及申、両脇迄も見ゆる也。観見二ツの見様、観の目つよく、見の目よはく見るべし。若又敵に知らずると云目在り。意は目に付、心は不付物也。能々吟味有べし。

一 間積りの事 ⑦ (***)

間を積る様、他には色々在れ共、兵法に居付心在によって、今伝る処、別の心あるべからず。何れの道なりとも、其事になるれば、能知る物なり。大形は我太刀人にあたる程の時は、人の太刀も、我にあたらんと思ふべし。人を討んとすれば、我身を忘るゝ物也。能々工夫あるべし。

一 心持之事 ⑧ (水：「兵法心持の事」)

心の持様は、めらず、かゝらず、たくまず、おそれず、すぐに広くして、意のこゝろろく、心のこゝろおもく、心を水にして、折にふれ、事に応ずる心也。水にへきたんの色あり、一滴もあり、滄海も在り。能々吟味あるべし。

一 兵法上中下の位を知る事 ⑨ (***)

兵法に身構有り、太刀にも色々構を見せ、強く見へ、早く見ゆる兵法、是下段と知るべし。又兵法こまかに見へ、術をてらひ、拍子能様に見へ、其品きら在て、見事に見ゆる兵法、是中段の位也。上段之位の兵法は、不強不弱、かどらしからず、はやからず、見事にもなく、悪敷も見へず、大に直にして、静に見ゆる兵法、是上段也。能々吟味有べし。

一 いとかねと云事 ⑩ (***)

常に糸かねを心に持べし。相手毎に、いとを付て見れば、強き処、弱き処、直き所、ゆがむ所、はる所、たるむ所、我心をかねにして、すぐにして、いとを引あて見れば、人の心能しるゝ物也。其かねにて、円きにも、角なるにも、長きをも、短きをも、ゆがみたるをも、直なるをも、能知るべき也。工夫すべし。

一 太刀之道之事 ⑪ (水：「太刀の道と云事」)

太刀の道を能知らざれば、太刀心の儘に振りがたし。其上つよからず。太刀のむねひらを不弁、或は太刀を小刀に仕ひなし、或はそくいべらなどの様に仕付れば、かんじんの敵を切る時の心に出合がたし。常に太刀之道を弁へて、重き太刀の様に、太刀を静にして、敵に能あたる様に、鍛錬有べし。

一 打とあたると云事 ⑫ (水：「打つとあたると云事」)

打とあたると云事、何れの太刀にてもあれ、うち所を慥に覚へ、ためし物など切る様に、おもふさま打事なり。又あたると云事は、慥なる打、見へざる時、いづれなりともあたる事有り。あたりにも、つよきはあれども、うつにはあらず。敵の身にあたりても、太刀にあたりても、あたりはづしても不苦。真のうちをせんとて、手足をおこしたつる心なり。能々工夫すべし。

一 三ツの先と云事 ⑬ (火：「三つの先と云事」)

三ツの先と云は、一ツは、我敵の方へかゝりての先也、二ツには、敵我方へかかる時の先、又三ツには、我も懸り、敵も懸る時の先、是三ツの先なり。我かゝる時の先は、身は懸る身にして、足と心を中に残し、たるまず、はらず、敵の心を動かす、是懸の先也。又敵懸り来る時の先は、我身に心なくして、程近き時、心をはなし、敵の動きに随ひ、其儘先に成べし。又互に懸り合時、我身をつよく、ろくにして、太刀にてなり共、身にて成共、足にて成共、心にて成共、先になるべし。先を取事、肝要也。

一 渡をこすと云事 ⑭ (火：「とをこすと云事」)

敵も我も互にあたる程の時、我太刀を打懸て、との内こされんとおもはゞ、身も足もつれて、みぎはへ付べき也。とをこして、氣遣はなき物也。此類跡先の書付にて、能々分別有るべし。

一 太刀にかはる身の事 ⑮ (水：「太刀にかはる身と云事」)

太刀にかはる身と云は、太刀を打だす時は、身はつれぬ物也。又身を打と見する時は、太刀は迹より打心也。是空の心也。太刀と身と心と一度に打事はなし。中に在心、中に在身、能々吟味すべし。

一 ニツの足と云事 ⑯ (水：「足づかひの事」)

ニツの足とは、太刀一ツ打内に、足はニツはこぶ物也。太刀にのり、はづし、つぐもひくも、足はニツの物也。足をつぐと云心是なり。太刀一ツに足一ツづゝふむは、居付はまる物也。ニツと思へば、常にあゆむ足也。能々工夫あるべし。

一 剣をふむと云事 ⑰ (火：「けんをふむと云事」)

太刀の先を足にてふまゆると云心也。敵の打懸太刀之落つく処を、我左の足にてふまゆる心也。ふまゆる時、太刀にても、身にても、心にても、先を懸れば、いかやうにも勝位なり。此心なければ、とたんとたんととなりて、悪敷事也。足はくつろぐる事もあり。剣をふむ事度々にはあらず。能々吟味在るべし。

一 陰をおさゆると云事 ⑱ (火：「かげをうごかすと云事」)*5

陰のかけをおさゆると云事、敵の身の内を見るに、心の余りたる処もあり、不足の処も在り。我太刀も、心の余る処へ、気を付る様にして、たらぬ所のかげに、其儘つけば、敵拍子まがひて、勝能物也。されども、我心を残り打処を不忘所肝要なり。工夫あるべし。

一 影を動かすと云事 ⑲ (火：「かげをおさゆると云事」)

影は陽のかけ也。敵太刀をひかへ、身を出して構時、心は敵の太刀をおさへ、身を空にして、敵の出たる処を、太刀にてうてば、かならず敵の身動出なり。動出れば、勝事やすし。昔はなき事也。今は居付心を嫌て、出たる所を打也。能々工夫有べし。

一 弦をはづすと云事 ⑳ (***)

弦をはづすとは、敵も我も心ひつばる事有り。身にても、太刀にても、足にても、心にても、はやくはづす物也。敵おもひよらざる処にて、能々はづるゝ物也。工夫在るべし。

一 小櫛のおしへの事 ㉑ (***)

おぐしの心は、むすほふるをとくと云ふ儀也。我心にくしを持って、敵のむすほふらかす処を、それゝにしたがひ、とく心也。むすほふるとひきはると、似たる事なれども、引はるは強き心、むすほふるは弱き心、能々吟味有べし。

一 拍子の間を知ると云事 ㉒ (水：「敵を打に一拍子の打の事」)

「二のこしの拍子の事」

「無念無相の打と云事」

「流水の打と云事」

拍子の間を知るは、敵によりはやきも在り、遅きもあり、敵にしたがふ拍子也。心おそき敵には、太刀あひに成と、我身を動さず、太刀のおこりを知らせず、はやく空にあたる、是一拍子也。敵気のはやきには、我身と心をうち、敵動きの迹を打事、是二のこしと云也。又無念無相と云は、身を打様になし、心と太刀は残り、敵の気のおしを、空よりつよくうつ、は無念無相也。又おくれ拍子と云は、敵太刀にてはらんとし、請んとする時、いかにもおそく、中にてよどむ心にして、まを打事、おくれ拍子也。能々工夫あるべし。

一 枕のおさへと云事 ㉓ (火：「枕をおさゆると云事」)

枕のおさへとは、敵太刀打ださんとする気ざしをうけ、うたんとおもふうの処のかしらを、空よりおさゆる也。おさへやう、心にてもおさへ、身にてもおさへ、太刀にてもおさゆる物也。此気ざしを知れば、敵を打に吉、入に吉、はづすに吉、先を懸るによし。いづれにも出やう心在り。鍛錬肝要也。

一 景気を知ると云事 ②④ (火:「けいきを知と云事」)

景気を知ると云は、其場の景気、其敵の景気、浮沈、浅深、強弱の景気、能々見知べき者也。いとかねと云は常々の儀、景気は即座の事なり。時の景気に見請ては、前向てもかち、後向てもかつ。能々吟味有べし。

一 敵に成と云事 ②⑤ (火:「敵になると云事」)

我身敵にしておもふべし。或は一人取籠か、又は大敵か、其道達者なる者に会ふか、敵の心の難堪をおもひ取べし。敵の心の迷ふをば知らず、弱きをも強とおもひ、道不達者なる者も達者に見なし、小敵も大敵と見ゆる、敵は利なきに利を取付る事有り。敵に成て能く分別すべき事也。

一 残心放心の事 ②⑥ (***)

残心放心は事により時にしたがふ物也。我太刀を取て、常は意のこゝろを**はなち**、**心のこゝろを**のこす物也。又敵を慥に打時は、心のこゝろを**はなち**、意のこゝろを**残す**。残心放心の見立、色々在物也。能々吟味すべし。

一 縁のあたりと云事 ②⑦ (水:「縁のあたりと云事」)

縁のあたりと云は、敵太刀切懸るあひ近き時は、我太刀にてはる事も在り、請る事も在り、あたる事も在り。請るもはるもあたるも、敵を打太刀の縁とおもふべし。乗るもはづすもつくも、皆うたんためなれば、我身も心も太刀も、常に打たる心也。能々吟味すべし。

一 しつかうのつきと云事 ②⑧ (水:「しつかうの身と云事」)

しつかうのつきとは、敵のみぎはへよりての事也。足腰顔迄も、透なく能つきて、漆膠にて、物を付るにたとへたり。身につかぬ所あれば、敵色々わざをする事有り。敵に付く拍子、枕のおさへにして静成る心なるべし。

一 しょうこうの身と云事 ②⑨ (水:「しょうこうの身と云事」)

しょうこうの身、敵に付時、左右の手なき心にして、敵の身に付べし。悪敷すれば、身はのき、手は出す物也。手を出せば、身はのく者也。若左の肩かひな迄は、役に立べし。手先に**心**あるべからず。敵に付拍子は、前におなじ。

一 たけくらべと云事 ③⑩ (水:「たけくらべと云事」)

たけをくらぶると云事、敵のみぎはに付時、敵とたけをくらぶる様にして我身をのばして、敵のたけよりは、我たけ高く成る心。身ぎはへ付拍子は、何も同意也。能々吟味有るべし。

一 扉のおしへと云事 ③⑪ (***)

とほその身と云は、敵の身に付く時、我身のはゞを広くすぐにして、敵の太刀も、身もたちかくすやうに成て、敵と我身の間の透のなき様に付べし。又身をそばめる時は、いかにもうすく、すぐに成て、敵の胸へ、我肩をつよくあつべし。敵を突たをす身也。工夫有べし。

一 将卒のおしへの事 ③⑫ (火:「しやうそつをしると云事」)

将卒と云は、兵法の利を身に請ては、敵を卒に見なし、我身将に成て、敵にすこしも自由をさせず、太刀をふらせんも、すくませんも、皆我心の下知につけて、敵の心にかくみをさせざる様にあるべし。此事肝要なり。

一 うかうむかうと云事 ③⑬ (水:「有構無構のおしへの事」)

有構無構と云は、太刀を取身の間に有事、いづれもかまへなれども、かまゆるこゝろ有によりて、太刀も身も居付者なり。所によりことにしたがひ、いづれに太刀は有とも、かまゆると思心なく、敵に相応の太刀なれば、上段のうちにも**三色あり**、中段にも下段にも三ツの心有り。左右の脇までも同事なり。爰をもつてみれば、かまへはなき心也。能々吟味有べし。

一 いわをの身と云事 ③⑭ (火:「いわをのみと云事」)

岩尾の身と云は、うごく事なくして、つよく大なる心なり。身におのづから万里を得て、つきせぬ処なれば、生有者は、皆よくる心有る也。無心の草木迄も根ざしがたし。ふる雨、吹風もおなじこゝろなれば、此身能々吟味あるべし。

一 期をしる事 ㉔ (* ** , 水:「直通のくらいと云事」参照)

期をしると云事は、早き期を知り、遅き期を知り、のがるゝ期を知り、のがれざる期を知る。一流に直通と云極意の太刀あり。此事品々口伝なり。

一 万里一空の事 ㉕ (空の巻)

万里一空の所、書あらはしがたく候へば、おのづから御工夫なさるべきものなり。

(跋)

右三十五箇条は、兵法之見立心持に至るまで、大概書記申候。若端々申残す処も、皆前に似たる事どもなり。又一流に一身仕得候太刀筋のしなゝゝ口伝等は、書付におよばず。猶御不審之処は、口上にて申あぐべき也。

寛永十八年二月吉日

新 免 武 蔵 玄 信

注

- *1 Teruo MACHIDA: Die Essenz der Schwertkampftechniken von Miyamoto Musashi—Eine interpretative Übersetzung seiner „Heiho Sanjugokajo“—, 『日本体育大学紀要』第42巻第1号, 2012年, pp. 51～66。なお、同論文の英語版も「研究資料」として公開されている。Vaughn WILLIAMS and Teruo MACHIDA: The essence of the swordfighting techniques of Miyamoto Musashi—An interpretive translation of his “Heiho Sanjugokajo”—, 『日本体育大学紀要』第42巻第2号, 2013年, pp. 165～179。
- *2 本稿の表題および前段において武蔵の姓を「宮本」と記したが、これは一般読者に配慮した結果である。二天一流野田派に伝わる口伝によれば、武蔵は文書に署名する際、その内容が剣の流儀に関わる場合は「新免」姓を、家系に関わる場合は「宮本」姓を用いて両者を明確に区別している。『兵法三十五箇条』に限らず、『五輪書』や『独行道』など、二天一流の弟子たちに残した文書にはすべて「新免」姓が記されている。
- *3 筆者前掲論文の注 *2, *3, *5, *8 を参照。
- *4 今日広く流布している「兵法三十五箇条」(岩波文庫版『五輪書』所収、渡辺一郎校注、1985年)は、顕彰会本を底本としながらも、根拠を明示せずに計18箇条を変更しており、問題性を孕んでいる。また、これに依拠した講談社版(鎌田茂雄訳注、1986年)も同様である。魚住孝至:『定本 五輪書』, 新人物往来社, 2005年, 183頁等を参照。魚住氏の詳細かつ綿密な諸著作は、今後の武蔵研究の礎を築く秀作である。しかし残念ながら、同書所収の「兵法三十五箇条」には欠落箇所が散見される。
- *5 本条㉔および次条㉕の『五輪書』との対応関係に注目されたい。ここには文言のみならず、『五輪書』執筆までの間における当該術理の教示内容の変化が認められる。筆者前掲論文の注 *14 を参照。

参考文献

※本文書の再現に際して比較考量した主たる文献のみを挙げる。

- ・宮本武蔵遺蹟顕彰会編纂:『宮本武蔵』(復刻版), 熊本日日新聞社, 2003年
- ・谷口寛:『史料考證 勸進・宮本武蔵玄信』, 鈴木印刷ショップ, 1995年
- ・魚住孝至:『宮本武蔵 日本人の道』, ペリかん社, 2003年
- ・魚住孝至:『定本 五輪書』, 新人物往来社, 2005年
- ・赤羽龍夫:『武蔵「円明流」を学ぶ』, スキージャーナル, 2010年
- ・宮田和宏:『宮本武蔵 実戦・二天一流兵法』, 文芸社, 2002年
- ・宮田和宏編訳:『五輪書 兵法二天一流真諦』, 文芸社, 2007年
- ・神子侃訳:『五輪書』, 徳間書店, 1963年
- ・渡辺一郎校注:『五輪書』, 岩波書店, 1985年
- ・鎌田茂雄訳注:『五輪書』, 講談社, 1986年

〈連絡先〉

著者名:町田輝雄

住 所:東京都世田谷区深沢7-1-1

所 属:日本体育大学外国語学研究室

E-mail アドレス:machida@nittai.ac.jp